

# コロナクラスター 小規模病院を直撃

診療する佐々木  
医師本人提供

北海道函館

北海道函館市にある函館稲北病院（104床、道南労働者医療協会）では、第5波の昨年8～9月と今年6月にクラスター（1カ所で5人以上）が発生。今年7～8月も4人の陽性者が出来ました。

同病院は一般病棟と回復期リハビリ病棟の2病棟が

新型コロナウイルスが感染拡大の波を繰り返して2年半。小規模病院はクラスター（感染集団）の発生でより深刻な経営危機に直面しています。

# 補助減り窮地

況です。補助対象の回復期病床が年々算定される仕組みの問題もあるといいます。

60%台に落ち

2歳の回復期リハビリ病床も含め全館で入退院を中止しました。

「10月時は入院中の減収約2000万円を、年度末の国の補助金（感染症病床確保促進事業費補助金）ではほぼ補てんできた」といいます。

6波では回復期病床で、今年5月19日の陽性者確認から6月4日の終息までに患者と職員計28人の陽性が確認されました。「私たちのよわな小病院では病床の稼働が90%以上、100%近くでないと経営は成り立たない」と佐々木さん。「8月の減収は1340万円にも上りました」。

しかし、今回はクラスターが大きなクラスターでしたら、当該病棟だけの入退院中止を指示。佐々木さんは「一般病棟の入退院は許可されていたが、次々とクラスターが広がるなか実施的に入退院を制限せざるを得なかつた」と話します。

その結果、5～6月の減収約1720万円に対して、国からの補助金は1フロアだけが対象の約140万円（員のみ）という厳しい状

あります。建物の構造上、専用病床を持つ病院と連携しません。この間、コロナ専用病床を持つ病院と連携し、発熱外来を開設して積極的にコロナ患者の診療に努めてきました。

理事長の佐々木恒医師は、「院内で陽性患者が出たときは、病棟全体をゾーンング（清潔区域と汚染区域を分ける）して入退院を中止する対応をしました」と話します。

## 入退院を中止

昨年8月の場合、3階的一般病床で患者の職員計7人が陽性だ。重症者と肺炎を起こした中等症の患者を転院させ、保健所の指導で